



TITLE:

漢代における長安と洛陽：新中國の考古學的調査を中心として

AUTHOR(S):

岡崎, 敬

CITATION:

岡崎, 敬. 漢代における長安と洛陽：新中國の考古學的調査を中心として. 東洋史研究 1957, 16(3): 280-310

ISSUE DATE:

1957-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148081>

RIGHT:

漢代における長安と洛陽

——新中國の考古學的調査を中心として——

岡 崎 敬

一 はじめに

長安、洛陽の名は、われわれになつかしい記憶をよびおこさせる。それは漢唐帝國の首都としてその文化に憧憬をおぼえたがつての日本のなごりであるかも知れぬ。これまで漢唐の歴史や美術をあつかうもので、こゝに遊び、この二都を問題としてとりあげた人々も少くなかつた。しかし不幸なる戦いによつて、この二都を訪ねることはきわめて困難になり、またその調査も長く未開拓のまゝにのこされていたのである。新中國の成立にともない各地に建設工事がすすみ、この兩都にもその工事がおよんだ。それによつて遺跡の發見が相つぎその報告書のでるたびに、私どもはむさぼるようになってよんだものである。

昭和三十三年四月、中國科學院の招聘により、日本考古學協會は毎日新聞社の援助をうけて新中國に考古學の視察團を出すことになつた。私は四月十六日東京を發ち、翌日廣東に入り五月一日廣東より香港にでるまで約一月半、北京をはじめ各地の遺跡、博物館を見學し、また各地の學者と懇談し得たのは幸いであつた。西安、洛陽もきわめて短時日ではあつたけれども、その地をしたしくふむことができた。考古研究所などの調査の現況をもみることができた。そのうちの漢代を中心とする調査についてのみ、こゝに報告し、その調査のもつ歴史的意味をいさゝかまとめてみようとおもう。

本稿をかくにあつて中國科學院、考古研究所をはじめ

中國の考古學者各位の絶大なる好意にふかい感謝の意を表するものである。

二 漢代長安とその遺跡

西安における考古学的調査

西安は陝西省の古都である。渭水の南にいまも城壁にかこまれ、碁盤の眼のような街なみがつづいている。周代すでに鎬京がもうけられ、秦の都咸陽もその對岸にあり、前漢および唐代にはその帝都として洛陽とならび稱されていた。晩唐以降、天下の中心が東南にうつるにおよび、地方の一都市として今日におよんだ。近郊にのこされた遺跡と街の區わりにわずかに古えをしのぶにすぎなかつたのである。

關野貞博士は明治四十年(一九〇七年)、西安およびその近郊をあるき、周漢唐の陵墓や遺跡について報告した。また足立喜六氏は明治三十九年(一九〇六年)より四十三年にいたる間、西安陝西師範學堂にあつて教鞭をとるかたわら漢唐の遺跡をたずね、明治四十年たま／＼西安に遊學した桑原隲藏博士⁽³⁾の指導を得て『長安史蹟の研究』(昭和八年)を公けにした。一方フランスのセガラン⁽⁴⁾(V. Segalen)調

査團も一九一四年西安にあつて漢唐の遺跡の調査をこゝろみ、その報告を公けにした。われわれは最近に至るまで長安の遺跡について、わずかにこれらの報告によつて渴をいやしていたのである。

中國では北平研究院考古組⁽⁵⁾が一九三三年(民國二十二年)より西安附近の一般調査をはじめた。唐の興慶宮、大明宮址を發掘し、寶雞縣鬪雞台では彩陶遺跡および周漢の墳墓を發掘した。蘇秉琦教授⁽⁶⁾が、その後十數年の研究をへて刊行した鬪雞台の報告において、われわれははじめて陝西省漢墓の内容をみるこゝができた。

新中國の成立にともない西安も中國西北の要衝として再び發展をとげつゝある。人口も一九五七年には百二十萬をかぞえ、西安城の郊外にぞく／＼と多くの施設がもうけられてゐる。これにともなつて新石器時代より周漢唐各代の遺跡遺物が無數にほりおこされたのである。

一九五六年中國科學院考古研究所が西安分室をおき、また西北大學が考古學專攻課程を設けたのは全く時機に適したものであつた。西安分室は西安市城の南郊、大雁塔の北にある。分室とはいへ煉瓦づくり、三階だての堂々たる建

物である。部屋は新石器、殷周、漢唐など數室にわかれ、主任夏鼐先生をはじめ一二〇名の所員を擁している。

かれらは、こゝを據點として西安近郊の調査にあたつてゐるが、東郊半坡村の新石器時代遺跡では一九五四年以來發掘がつゞけられており、いま現地に整理陳列のための建物がたてられている。澧西の周代車馬坑の遺跡や後にのべる漢長安城の發掘なども西安分室から調査班がでている。われわれは石興邦氏の案内で小麥畑をぬいながらこれらの遺跡をおとすることができた。

中央の考古研究所の他に、陝西省に文物管理委員會があり、こゝにも工作員がいて、各地に遺跡がほりおこされた場合、直ちに調査におもむける仕組みになつてゐた。文物管理委員會には陝西省博物館(館長武伯倫氏)があり、こゝに各代の遺物を陳列する。博物館はかつての孔子廟、これが後に碑林となり、いままた、これを基礎として博物館に發展させたもので歴史博物館、銅器館、彫刻館、碑林などの部門がある。漢唐考古學を志すものにとつてまずはじめに見學すべきところであることはいうまでもない。

(1) 關野貞博士「支那の陵墓」(『支那の建築と藝術』所收) 昭和十三年刊。

(2) 足立喜六氏『長安史蹟の研究』二冊(東洋文庫論叢第二十之一) 昭和八年刊。

(3) 桑原隲藏博士『考古遊記』長安の旅、昭和十七年刊。

(4) Victor Segalen, Gilbert de Voisins & Jean Lartigues:

Mission archéologique en Chine. Paris 1914. I.

L'Art funéraire à l'époque des Han. Paris 1935.

(5) 『國立北平研究院五週年工作報告』民國二十三年刊。

(6) 蘇秉琦教授「關雎台溝東區墓葬」(國立北平研究院史學研究所陝西考古發掘報告、第一種、第一號) 北平、一九四八年刊。

漢代長安城の遺跡

漢代の長安城は隋唐長安城の西北にあり、唐代はその禁苑⁽¹⁾になつてゐた。いまの西安は隋唐長安城の北邊にあるから、西安市の西北郊にあたる。渭水はその北で東北流しており、現在このあたりは一面の小麥畑になつて、その土城がえん／＼とつらなつてゐるのをのぞむことができる。

この土城のプランについてはいまだ精密な測量圖は公けにされていない。『三輔黃圖』卷一によると「周圍六十五里、南は南斗形をなし、北は北斗形をなす、今に至つて人

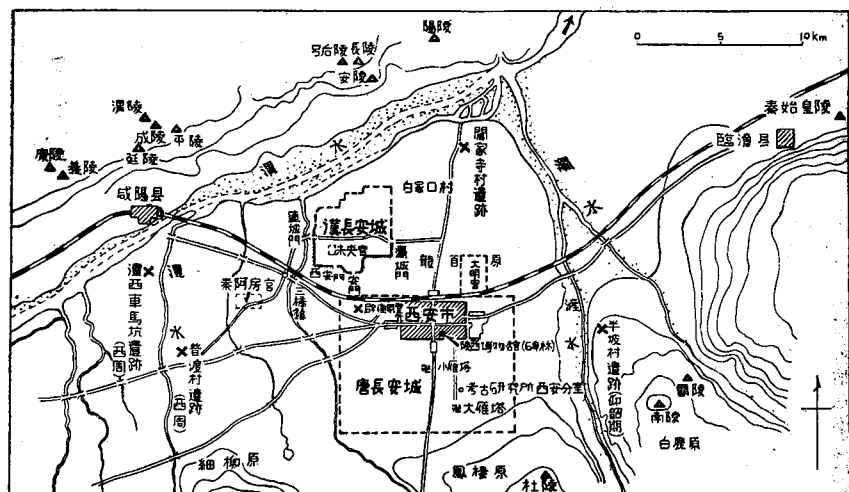
漢京城をよんで斗城となすは是なり」といつている。清の楊守敬『水經注圖』長安城圖や『長安縣志』にはばあらしの恰好をのせている。おそらく當時の概略の形に『三輔黃圖』などを参照して城門や宮殿の名前をいれたものである。

これによると東に宣平門、清明門、灊城門、北に横門、洛城門、利城門、南に覆盎門、安門、西安門、西の雍門、直城門、章城門の計十二門がある。足立喜六氏はこれにもとずいてその東邊と南邊を實査した。南邊の一部は『考古通訊』⁽²⁾『文物參考資料』⁽³⁾などに断片的にみえるが、前記『水經注圖』にみえるものとほぼ近く決して整形ではない。われ／＼の一行のうち杉村、水野、杉原、關野教授の一行は東西の土城を駒井教授、樋口および私もは南と西の土城をみた。

これらを綜合してみると漢長安城は隋唐長安城のごとく左右相稱の整つた形でなくて、むしろ齊の臨淄や燕の下都のように不整形といわざるを得ない。(第一圖)

城内の施家莊に發掘本部があり、王仲殊氏がその主任である。工作員二十名ばかり、この外六、七十人の人夫が、東の灊城門、西の直城門、南の西安門などにわかれて、ま

す門址から發掘をつづけていた。西安門や灊城門のまわりは一段低くほり下げられてゐる。いまは麥畑となつてゐるが武帝元光



第1圖 長安をめぐる遺跡要圖



第2圖 漢長安城 直城門附近の土城

六年（一二九年）渭水の水をひいた漕渠であろう。土城はわれわれのみた南邊はよくのこつており、西邊もところ／＼けずられたところがあるが比較的よくのこつている。

直城門は門の下に三つの道があり、版築の土台にやけた土がおちこ

んでいる。

版築は上か

らまるい棒

で固くたゝ

いている。

城門の上に

はおそらく

樓門があつ

たのであろ

うが、王莽

末の戦火で

失われてし

まつたので

ある。しか

し唐代にもこの道がひらかれてこゝに一つの家があり、唐代の轍のあとをのこしている（第二圖）。西安門も城門のあつた版築の基壇と焼土のおちこんだ道が發掘されていた。東の瀾城門はわたくしはみなかつたが、ほゞ同様で、礎石とひき臼がでゝいたという。

(1) 平岡武夫「唐代の長安と洛陽」地圖、一九五六年、第二圖。呂大防、長安城圖。

(2) 蘇秉琦、吳汝祚「西安附近古文化遺存的類型和分佈」（『考古通訊』一九五六—二）。

(3) 劉致平「西安西北郊古代建築遺址勘查初記」（『文物參考資料』一九五七—三）八頁。

(4) 宮都宮清吉「西漢の首都長安」（『漢代社會經濟史研究』所收）昭和三十年刊。

漢代長安城内の遺址

長安城内の主要な宮殿は長樂宮と未央宮であり、長樂未央とならび稱された。長樂宮は長安遷都の際これをつくり、未央宮は高祖七年（前二〇〇年）これを營造した。いまも西安門の北にのぞむことができる。北がたかく、南になるにつれて低い。かつては三十二台、十二池、四山、八十一宮殿、十四掖門をかぞえる宮殿群があつた。未央宮のうしろにある灰坑から元始五年（紀元五

年) 尙方作長樂宮青銅燭台、香爐が五銖錢とともに發見された⁽⁴⁾というのは王莽の末年、府庫が多く掠奪された時埋没されたものであろうか。これはいま發掘本部におかれているが、本部には城の内外各地より出土した古瓦、錢范の類も保管されている。これらのなかにはすでに報告されたものがあるので、愈韋超氏⁽²⁾、陳直氏⁽³⁾らの報告にもとずき記述をすゝめる。

1 石渠閣 天祿、石渠閣の遺址は未央宮の前殿正北に半里間隔でのごつてゐる。石渠閣から一九五四年多數の錢范が出土した。これはすべて陶製で、五銖、大泉五十などの種類がある。石渠閣は諸儒の經書を講じ、秘書を藏したところである。『漢書』宣帝紀甘露三年にも諸儒に五經の同異を講ぜしめたことがみえる。こゝに王莽代の錢范のであることは、王莽代には天祿閣に書を藏し、こゝは造范所となつたと陳直氏はいつてゐる。

2 好漢廟 漢城の西側土城より五里ばかり東にあたる。廟址は小丘上にあり、その丘は版築できづかれ、その断面やまわりに、多くの瓦片があり、中には山形文半瓦當、陶錢范があつた。山形文半瓦當は燕の下都や、最近河北省石

家莊市庄村からでたものとかいものがあることは注意される。好漢廟は十數年前、一大坑より錢范が出土し、千をもつてかぞえたという。大泉五十がもつとも多く小泉直一これにつぎ、別に壯泉四十、小布一百、中布六百、次布九百などがあり、「始建國」の三字のある錢范一個がみられた。また五銖一泉のは小泉范直一と大小おなじで居攝年間の製作とされる。いずれも王莽代の錢范である。

3 建章宮 好漢廟と漢城西土城の間にある。「漢并天下」「延年益壽」の瓦當がでゝゐる。建章宮は武帝の太初元年にたてられたものであるから、この瓦は武帝から昭帝の間のものである可能性がある。

4 相家巷 未央宮のま北、七・五中國里にある。村の北の地形やゝ隆起し、長安城の北の土城になるのではないかと考えられる。村の東から錢范が出た。こゝから、石質上横文五銖面范(武帝)一、陶質上横文五銖面范(宣帝)二、陶質五銖背范二、陶質小五銖背范二(錢徑一・二センチ)、瓦當などが出た。

こゝもかつて五銖錢の錢范が多數でゝあり、陳直氏はここを漢代鍾官署の遺址にあてゝゐる。

5 六村堡 相家巷の西、漢城の西北角上にあたる。堡

内にたかく版築の土台があり、漢代の建物があつたとおもわれる。村の南の麥畑のなかに多くの瓦俑がうすたかくつまれていた。これには裸體の男子、舞踊する女子の瓦俑があり、後者は漢城の東にある白家口の西漢木槨墓から出た舞俑⁽⁴⁾と完全に一致する。おそらく瓦製明器、俑をつくつた坊の遺址と考えられる。

(1) 水野教授、關野助教教授班の實見による。

(2) 愈偉超「漢長安城西北部勘查記」(『考古通訊』一九五六一五)

(3) 陳直「石渠閣王莽錢的背面范」(『考古通訊』一九五五—二)

(4) 『文物參考資料』、一九五五—三の表紙。

漢長安城附近の建築址

考古研究所の手による漢城調査のほか陝西省文物管理委員會によつて漢城附近に漢代の建築遺址が調査された。

1 閻家寺村 漢城の東北にあたる。遺跡は渭水と灊水とにかこまれた台地上の數百メートルをはかる土台の東北にある。鐵道工事のため、こゝがきりひらかれ、二つの部室のある建築址があらわれた。東の部室にくらべて、西の部室はやゝ小さく室内五メートル平方にみたない。室内に土台があり、そのまわりに方壇をしく。土台のよこに井戸

の口があり、その下に陶製井圈(徑約一メートル)が三層におかれてゐる。また爐があつて、けむりだしはかべの中を通つて外にでる仕組になつてゐる、一種の暖房裝置であるのはおもしろい。

2 辟雍または明堂址 漢城の南の正門である安門の南に一大土台があり、こゝに亞字形の建築址のあることがわかつた。發掘者劉致平氏はこれを漢代辟雍または明堂の址としてゐる。

3 曹家堡 村の西南三百メートル、漢城の南二キロのところにある。探查の結果、外牆は正方形、一邊二七〇メートル、南の大門はま南に面し、長さ約三〇メートル、中央に六メートルをへだてゝ左右に一〇から一三メートルをはかる版築の土壇があり、闕のような左右相稱の建物があつたらしい。火災のためやけて木炭がのこつてゐる。未央宮に對するところがあり、漢の太廟である可能性がある。

4 大土門村 村の北二百メートル、漢城の南約二キロの地點にある。中央に約六十メートルの版築の土壇があり、こゝに四注屋根の建物があつたらしい。道には小石をしき、まわりに方形の牆があり、その外に水渠がまるくめぐらさ

れていた。

5 草灘區閭新村 村の西約二〇〇メートルに長方形の版築の土壇がある。四時期の遺物があり、第三層が漢代に属する。その層に二個の小屋があつた。東のものは四面に土かべがあり、西のものは北側の東端に門をひらき、西側に窓がある。東南隅に陶爐一個があり、陶管がかべをめぐつて暖をとるようになってゐる。また北のまどに陶圈があり、小井をなしていて冷藏装置と發掘者は考へてゐる。

(1)劉致平「西安西北郊古代建築遺址勘查初記」(『文物參考資料』一九五七—三)。

王世仁「西安市西郊土地的漢代建築遺址」(同、一九五七—三)。
 郝英濤「西安的幾處漢代建築遺址」(同、一九五七—五)。

漢長安城をめぐる漢代の墳墓

前漢の皇帝は陵墓をおおむね渭水の北にいとなく、その壯大さを誇示したのであるが、數世紀にわたる漢帝國の存續はその士人層の生活内容を向上せしめ、上にならつた墳墓をつくるにいたつたのである。

前漢の陵墓中、文帝灃陵(白鹿原)、宣帝杜陵(杜原)が漢城東南の丘陵にあるほかは高祖長陵、惠帝安陵、景帝陽陵、武帝茂陵、昭帝平陵、元帝渭陵、成帝延陵、哀帝義陵、平

帝康陵などすべて漢城對岸、渭水の北原にある。いずれも方墳で、秦始皇帝驪山陵の形式をおそつたものであることはあきらかである。われわれは蘭州から西安にでる車窓から茂陵をのぞんだにすぎない。しかし渭水の北原上にたゞずむこれらの墳丘はわが應神、仁德陵の如く、帝王の威力をいまにつたえてゐる。これらの帝王陵は關野、足立、セラン氏の調査があるが、將來漢代墳墓の一基準としてさらに明らかにされるであらう。

西安郊外の漢墓については、しだいに注意されている。茹士安、何漢南氏によると次の六種類があるという。

1 大方坑木槨墓……………西安北郊白家口村

2 土洞墓
 a 豎井式墓道……………西安東郊紅慶村、北郊白家口村
 b 長斜坡墓道……………西安四郊、長安、咸陽寶雞各地

3 塋室墓……………西安、咸陽

4 空心塋墓……………白家口村

5 陶棺墓……………西安東郊、西郊

6 豎穴塋室墓……………

大方坑木槨墓は大きな方坑に木槨の墓室をいとなんだも

ので、長沙や樂浪の例を想起させるが、くわしい報告のないのは遺憾である。空心塋墓は普通の塋墓より古い形式であろう。土洞墓は地下にほりこんだ日本でいう地下式土塋とでもいうべきもの、蘇秉琦教授の報告された寶雞鬪雞台の漢墓はこれに屬するものである。一九五四年西安市の東郊、白鹿原の台地上で出てきた四つの漢墓のうち三つは地下な、めに墓道をほり墓室をいとなみ、室の入口は塋でつくつてゐるが、室そのものはほりこみのまゝらしい。副葬品として内行花文鏡、方格規矩鏡、五銖錢のほか瓦製明器（案、勺、奩、井、倉、かまど、猪、犬）などがある。發掘者は後漢の中後期にあてゝいるが、穩當なところであろう。一三號墓も同様に地下にほりこんでゐるが、墓室でつくり、天井はドームをなしてゐた。長宜子孫行花文鏡（鉛鏡）、夔鳳鏡、双獸鏡、のほか瓦製の明器一群があり、後漢末より三國時代に下るものであろう。

一九五五年西安市東郊十里舖の長樂原でも、後漢墓一基が知られてゐる。これは前室と主室よりなり、前室の南北に小室を加えたもので、南の小室が土室であるほかは塋で構築してゐる。主室に人骨二體、鏡、五銖錢、北の小室に

人骨二體、鏡、小銅刀、五銖錢九〇枚、南の小室では人骨三體、鏡一、小銅人一、陶洗、小銅刀、前室では人骨一體、鏡一、小銅刀一、鐵刀一、鐵洗一、綠釉陶壺一、陶倉一などが出土した。鏡は四獸鏡二、内花文鏡一をふくんでおり、四獸鏡にはそれ／＼

「尙方明鏡 服老富昌 長宜侯王 其帥命長」
「其帥命長 □□□王 富貴益昌 □□□□」
の銘がみられる。

鏡などより考え、後漢末年にあてられる。

長安附近において漢代の墳墓ことに前漢のものがいまだ明瞭でないのは遺憾である。陝西省博物館の漢代資料室には、鐵製生産用具をはじめ漢代の遺物が陳列してあるが、多くは古墓出土品であろう。

(1) 中私官鍾 双環のある青銅鍾、興平縣出土、「容十升重卅八斤、太初二年造、第九十一、中私官鍾」の刻銘がある。太初二年は紀元前一〇三年にあたる。

(2) 畫漆鏡 體は青銅、上に漆をぬつたもの。西安市西北郊白家口村出土。

(3) 鑿金方格規矩四神鏡 完好な四神鏡の文様上に鍍金を

ほどこしたものの。長安縣王村出土。

(4) 綠釉瓦製明器（かまど）咸陽縣出土。

(1) 茹士安、何漢南「西安地區工作中的發現」（『考古通訊』一九五

五—三）

(2) 韋偉超「西安白鹿原墓葬發掘報告」（『考古學報』一九五六—三）

(3) 雒忠如「西安十里鋪東漢墓清理簡報」（『考古通訊』一九五七—四）。

長安をめぐる考古學上の諸問題

漢の高祖が楚の項羽をやぶり、天下を一統し、都を長安にさだめたのであるが、

政治的には統一をみたようにみえても、決して内容はそうでなかつた。『漢書』地理志の末に「漢興つて都を長安に

たて、齊のよろ／＼の田氏、楚の昭、屈、景氏およびもろもろの功臣家を長陵（高祖の陵）にうつした。その後、世々、吏二千石、高資富人および豪傑、兼併の家族を

諸陵にうつした。これは幹をつようし、枝をよわくするもので、たゞ山園に奉仕するばかりのものではない。この故に五方から雜錯して、風俗は純でなくなつた、世家は禮文を好み、富人は商賈して利をいたし、豪傑は游俠して姦を通ずるにいたつた」とのべている。宇都宮清吉教授は「純ならず」を「各地の人々がこゝに雜居することになり、風

俗は統一的でなくなつた」と解釋する。長安の成立にあた

り、齊の田氏や楚の昭、屈、景氏などの來たことは重要である。かれらはおそらく、齊や楚の文物趣味をもちこんだ

に相違ない。長安、さかのぼつて咸陽、秦の地はかれらにとつては一面異域とみえたにちがいない。かれらは從來の傳統をもちこんであらたに漢代文化の形成に貢獻したこ

であらう。今後の發掘にあたつて、これらのことは、墳墓の構造、青銅器、鏡、漆器などの工藝品、建築その他につ

いて注意すべきであらう。好漢廟から出た山形文半瓦當が燕の下都から出たものと軌を一にするものがあり、また施家莊發掘本部の立樹双獸半瓦當は、關野雄助教授の調査さ

れた齊の臨淄などのものとおなじでおそらく齊の田氏の長陵來住とは無關係ではないであらう。

長安都城およびその近郊の調査はひきつゞきおこなわれるものと考えられるが、わが奈良文化財研究所の行つてゐる航空測量ならびに地圖の製作は、かの地の工作にとつて参考にならうし、また長安の大規模な工作は私どもにとつても反省の材料になるであらう。

(1) 宇都宮清吉「西漢の首都長安」（前掲書）一六〇頁。

(2) 施家莊發掘本部藏、水野教授實見。

(3) 關野雄『半瓦當の研究』昭和二十七年刊。

同「齊都臨淄の調査」、『中國考古學研究』所收、昭和三十一年刊。

前漢長安城の建設を『史記』高祖本紀によつてしるすと、

1 七年二月、長樂宮成る。丞相已下徙りて、長安を治む。

2 八年、蕭丞相、未央宮を營み作り、東闕、北闕、前

殿、武庫、太倉をたつ。

『呂后紀』惠帝の條に、

1 三年、長安城をきづき、四年 半につき、五年六年

城なる。

『前漢書』本紀では、

1 高祖五年九月、諸侯の子を關中に徙して長樂宮を治

む。

2 七年二月、蕭何、未央宮を治め、東闕、北闕、前

殿、武庫、太倉を立つ。

3 惠帝元年正月、長安をきづく。

4 三年春、長安六百里内の男女十四萬六千人を發

して長安をきづく。三十日にして止む。

5 三年六月、諸侯王列侯徒隸二萬人を發して、長

安をきづく。

6 五年正月、また長安六百里内、男女十四萬五千

人を發して長安をきづく。三十日にしてやむ。

7 五年九月、長安城なる。

8 六年六月、長安西市を起て、敖倉を修む。

とあり、長樂宮、未央宮については年代に若干のちがいがあるが、漢城については、ほとんど同じく、『前漢書』がやくわしくしるされている。

これらの記事にしたがえば、高祖の時、長樂宮未央宮ができたが、土城はなかつたものらしい。惠帝の代の五年間の歳月と數十萬の勞力は主として土城や建築土台の築成に費されたものであるらしい。現在新中國の調査にあたり、漢長安城のみならず、洛陽における周漢の土城、鄭州における殷代の土城においても精密な發掘と測量が行われてゐる。いま長安は正史に比較的くわしい記事があるので、よい參考になる。

長安城の發掘により瓦磚、錢范、青銅器に紀年銘を有するものが發見され、また紀年銘を有しないものでも出土の場所から年代の想定を下せるものがある。建章宮から出た

瓦當などはその一例である。また瓦製明器や錢范などの出土地點からこれらの製作所が考えられるのも興味あることである。

前漢長安城の終焉は王莽の最後とともにおとすれた。『前漢書』王莽列傳に

更始元年（紀元二三年）、衆兵、莽の妻子父祖の冢を發掘し、その棺槨および九廟、明堂、辟雍をやく。火は城中を照らす。……（この年王莽殺さる）

更始二年、更始（將軍）はじめて長安に到り、詔を下して大赦す。……長樂宮の府藏完く具わるも、ひとり未央宮焼く。

その翌年夏、赤眉ついに長安の宮室市里をやき、更始を害す。民うえて相食ひ、死する者數十萬、長安（廢）墟となる。城中人の行くことなく、宗廟、園陵みな發掘せられて、たゞ霸陵、杜陵のみまつたし。

とみえる。『後漢書』光武帝紀によると赤眉が長安に入つたのは九月とし、建武二年正月「西京の宮室をやき、園陵を發掘した」としている。この時すでに後漢の光武帝は都を洛陽に定めていたのである。

後漢の建武十九年その宮室が修覆せられて、西都としての役割りをはたしたが、前漢の富盛をとりもどすことはできなかつた。しかし前漢帝陵の陵邑の人々が、後漢の官僚社會にさかんに活躍していることは『後漢書』列傳にみとめることができる。この傳統は魏晉北朝をへて唐代にも至ことは「五陵の年少金市の東」という唐詩から明らかである。五胡十六國の間、前趙、前秦、後晉がこゝに都し、北魏の分裂したあと西魏、北周ともこゝによつてゐる。陝西省博物館に、大夏眞興六年（四二四年）の一大石馬がある。これには

大夏眞興六 年歲在甲子 夏五月、

、三日、 、、將軍 、、造茲

、、石、 、、副、 阿樹

の刻がある。夏の赫連勃勃は昌武元年（四一八年）長安を陥れ帝と稱した。この石馬をみると霍去病の石馬を想起せしめるものがあり、模仿のあとは歴然としている。たんに様式をおなじうするというだけのものではない。

三 各代洛陽と漢代河南縣城

洛陽は周王城の地、後漢、魏、晉ならびに北魏の帝都であり、唐代にもあらたに洛陽城が經營された。漢唐を通じ長安、洛陽は東西兩都とならび稱せられたが、必ずしも一個所をさすものではない。いまの洛陽縣城は唐代の洛陽城の北にあたる。われわれは五月二十五日洛陽驛についた。陳公柔(考古研究所)、蔣若是(河南省文物管理委員會)、王冠英(洛陽市文化局長)諸氏の東道で、主として洛陽西郊の遺跡を見學することができた。われわれの前を歩いた原田先生の一行程は漢魏洛陽城、白馬寺、南郊伊水にのぞむ龍門石窟にもおもむかれたが、後にとりあつかう後漢—北魏洛陽城を私どもの一行は車窓から首をのばして觀察するにとまつたのは、遺憾というほかはない。たゞ幸いにも考古研究所洛陽分室ならびに周公廟の洛陽博物館籌備處を見學し、いろいろと教えられるところがあつたので、中國考古學者の調査の報告を参照しながら、主として漢代の遺蹟を紹介することにしたい。

洛陽における考古學的調査

周、漢、唐の洛陽を對象とする考古學的調査は、西安のそれとくらべて、從來必ずしも多くなかつた。清朝末年汴洛鐵道の開設にともない漢唐の

明器瓦俑がもたらされたが、出土状態は全く不明のまゝにおわつた。一九〇七年シャヴアンヌ教授(Edouard Chavannes)は龍門石窟をたずね、のちにその報告を公けにしているが、その業績はながく學界に影響をあたえた。この年わが塚本靖、關野、桑原博士も洛陽にあそび、四十三年には小川琢治、濱田青陵博士もこゝに至つてゐる。昭和十一年には東方文化研究所より水野清一、長廣敏雄⁽³⁾兩教授が龍門にいたり、龍門石窟の調査報告を刊行した。

漢魏洛陽城の東北角にあるいわゆる洛陽金村からおびたらしい青銅器が出土し、一九二三年ホワイト師(W. C. White)はこれを實査して、その報告を公けにした。その報告によつて、いわゆる韓君墓は木槨墓であつたことが明らかにされた。出土の遺物⁽⁵⁾からみて戰國時代末期のものであることはうごかない。この時ホワイト師は金村周邊の土城の實測をおこなつたが、これは漢魏洛陽城の實測圖として⁽⁶⁾はじめてのものであり、水野教授⁽⁷⁾による北魏洛陽城の復原はこれをもとにして生れたのである。

新中國の成立にともない、洛陽の發展も當然のことであつた。ことに東西郊には道路が貫通し、あらたに土木建築

がおこなわれたのである。考古研究所も一九五二年以來調査を開始し、河南省文化局工作隊ならびに洛陽市文物管理委員會考古工作隊が、各年着實な調査をすゝめ現在にいたっている。

現在洛陽には考古研究所洛陽工作站がある。一九五三年の開設にかゝり、工作站といつても標本室、工作室、會議室、倉庫があり、宿舍までとゞつた研究施設であり、洛陽近郊の調査をする場合の據點で、三十名ばかりの工作人員がいる。またちかくの周公廟は洛陽市博物館籌備處になっている。時代をおつて歴史的に陳列されているのは中國の他の博物館と同様である。

(1) Edouard Chavannes: *Mission archéologique dans la Chine septentrionale*. Planche II, Paris 1909. Text II, Paris, 1915.

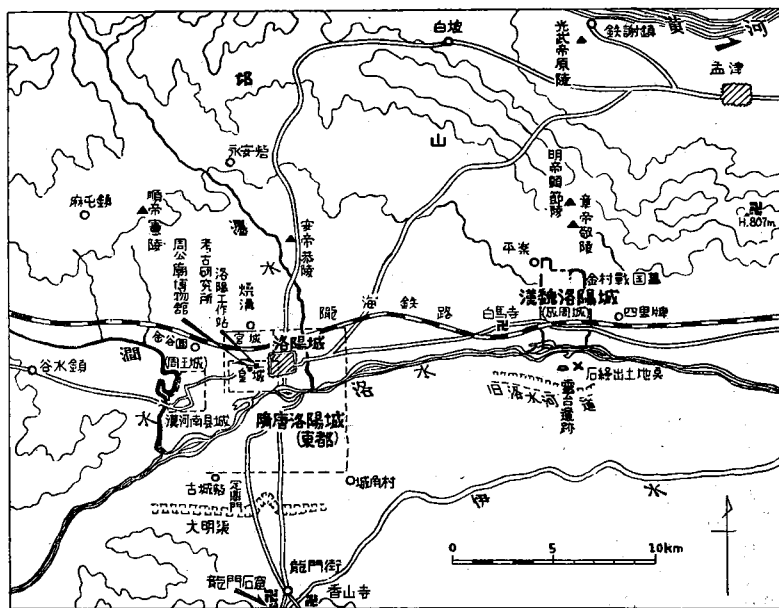
(2) 桑原博士『考史遊記』長安の旅。

(3) 水野清一、長廣敏雄『龍門石窟の研究』(東方文化研究所報告) 昭和十六年刊。

(4) W. C. White: *Tombs of old Lo-yang Shanghai* 1934.

(5) 出土の遺物をこく明にあつめた圖錄に梅原末治博士『洛陽金村古墓聚英』昭和十九年刊、がある。

(6) W. C. White: *ibid.* p. 13.



第3圖 洛陽をめぐる遺跡要地圖

(7)水野清一「洛都永寧寺解」(『考古學論叢』第十輯)昭和十四年刊。

周漢唐の洛陽の位置

さて洛陽といつても周公の洛邑にはじまり、各代その位置がかわつてゐる。大きくいつて周、漢魏晋北魏、隋唐の三時期があり、周のものはいまの洛陽の西郊に、漢魏晋北魏の洛陽はいまの洛陽の東郊に、隋唐の洛陽はいまの洛陽より南にのび、洛水をはさんだ大規模なもので、現在の洛陽縣城はその城内北側のごく一部分をしめるにすぎない。

一九五四年洛陽における基本工事の進捗にともない、新市街の擴張は必然的にかつての王城にくいこむため、その保存が問題としてとりあげられた。文化部は考古研究所と協力してこの仕事をすゝめ、郭寶鈞氏(考古研究所研究員)と、閻文儒氏(北京大學考古系)がこの任にあたつたのである。閻教授は漢六朝ならびに隋唐の洛陽城の調査を行つたが、郭研究員⁽¹⁾は周王城の調査を開始した。周王城は所傳はあるものの、地上にまつたく痕跡をとゞめず、麥畑となつてゐるので、1 文献の準備、2 現地における地形の觀察、3 現地のボーリングならびに發掘、という順序で、

作業をすゝめたのである。發掘の結果は、周王城をたしかめ得ず、漢の河南縣城がでゝきた。『史記』周本紀にひく括地志には「故王城一名河南城」とみえ、この他漢の河南城が周の王城であつたとのつたえは多いので一應こゝにあてたようである。ところが近時金谷園の發掘にあたり、また土城の北壁があらわれたのである。われわれは幸いにその發掘に案内されたが、北の一邊、一九五〇メートルをはかり、はゞはひろいところでは一一メートル、普通七メートルから五メートルで、その北は溝となつてゐる。土城に漢代墳墓のかゝつてゐるものがあり、すくなくもそれ以前、東周のものかもしれない。發掘はひきつゞき行われるようであるから、周の王城の全貌をあらわす日もとおくないにちがいない。

(1)郭寶鈞「洛陽古城勘察簡報」(『考古通訊』一九五五—一)

漢代の河南縣城の調査

さきにのべたように周王城を發掘する豫定から、漢代河南縣城⁽¹⁾があらわれるにいたつた。

『尚書』洛誥、『逸周書』作雒解、國語、『周語』などから周王城は洛水の北、澗水の東、漚水の西にあり、王城の西南角には穀水(澗水)と洛水が接近してながれてゐることが

わかり、王城は澗水の東にちかく、澗水の西よりははなれていることが想定された。一九五四年四月このあたりの比較的地形の高いところをえらび、八日よりボーリングならびにトレンチをいれたのである。この結果、澗河東岸の中央部に正方形にちかい南北一四〇〇メートル、東西一四六〇、周囲約五七二〇メートルの土城址のあることがわかった。土城の基部は地面下にうもれているが、はゞおおむね六・三メートル、現在のこつている高さは四〇センチより、高いものは二・四メートル、版築のあつさは南、北、東側のものは比較的あつく、六・一〇センチ、西側は五センチである。出土の陶器は二手あつて、先秦のものは鬲、釜、簋、豆があり、刻銘のあるものがある。五銖銭をとものうものは鬲や豆が少くなり、「河市」という印文のあるものがあり、漢代のものと考えられる。土城下には戦國墓があり、土城には漢代の埴がまじつていた。また土城の上には漢代の甕棺墓があり、この點から土城が漢代のものであることが明らかになつた。先にのべた『史記』周本紀所引括地志、『後漢書』郡國志河南尹の條、『尚書』洛誥鄭玄註、同孔氏傳などに周の王城は漢の河南縣城にあてゝおり、郭

寶鈞氏はこれをもつて河南縣城に比定したのである。この發掘にあたり、半瓦當が多數出土している。調査者はこれを戦國時代のものにあてゝいるが、その文様には漢代瓦當一般にみる蕨手文を半截にしたものがあり、その正確な年代は將來の問題にならう。

(1) 郭寶鈞「洛陽古城勘察簡報」(前掲書)

「洛陽西郊發掘簡報」(『考古通訊』一九五五—五)

(2) 郭寶鈞、馬得志、張雲鵬、周永珍「一九五四年春洛陽西郊發掘報告」(『考古學報』一九五六—二)

漢代河南城
内の發掘

一九五四年春の調査にもとづき、一九五五年四月より六月に至る間、河南縣城内の發掘が行われた。東、中、西の三區平行してすゝめられた。

東區は縣城中心線よりやゝ東に偏したところで、このあたりの地勢は高くなつてゐる。家屋址、倉庫址、灰坑、砂利道、井戸、水道などがある。南側の家屋址(三〇四號)は後漢のもので地下にうもれた分は四邊に埴を用いてゐる。

井戸は基層に埴をおき、六角形をなし、口徑五二センチをはかる。ふかさ五・二メートル、埴、陶片がでてきた。三一二號家屋址は長方形、東西六・六メートル、南北三・四

五メートル、後漢の層下にあり、出土品の多くは前漢のものである。瓦埴、陶片のほか、鐵器（斧、鋸、小刀）、銅錢（大泉五十、貨泉）が出土した。三二四號家屋址は南北二室あり、土器、紡錘車、鐵器（犁、刀、釘）や銅錢（半兩、五銖、大泉五十、貨泉、布泉）がでた。後漢の遺物が多いという。三二七號家屋址の上から瓦棺墓が出た。長さ一・九メートル、頭部の下に埴をおいている。後漢の末年洛陽一帯に流行した形式である。

倉庫の形式は前漢と後漢のものではやゝちがうとしている。前漢のもの（三四〇九號）は地面に圓坑をうがつたもので、直徑二・七五メートル、内部から陶片、鐵斧、鐵鏟、銅錢（貨泉、大泉五十、貨布）などが出土した。後漢のものは全部で七個、おおむね埴すみの圓困である（二つの例外は三二〇號が埴すみ方形倉、三四〇b號は土をほりこんだ圓坑）。徑三メートル前後、陶器、鐵製生産用具、銅錢がすくなくなかつた。興味のあるのは三〇七號困の底に石炭のものがあつた。石炭のものは三三三、三三五號灰坑および北部の三一〇號困のそこにもあつた。報告者黃展岳氏は『史記』外戚世家にみえる「饒少君は其主と

なり山に入り炭を作る」をひいて石炭の使用は前漢にあつたのではないかという疑問を提出している。

中區は河南縣城の中心地區で、こゝから家屋址二、圓困四、井戸二、灰坑十一、水道三、道路五條がほり出された。この中で注意されるのは前漢の灰坑第一〇八、一〇九號の二坑である。こゝから陶器（釜、甑、盆、碗、豆）、半瓦當が出土したが、これとともに二十數個の封泥が出土し、なかに「河南太守印」、「史守印信」、「雒陽丞印」その他、「三丞」、「七丞」、「卅印」などの殘字の見える封泥片があつた。

河南太守印は武帝より王莽までの印制と符合する。

西區ではもつぱら土城の探查にむけられた。こゝでしらべられた三土城のうち、一個は一九五四年に漢河南縣城の附加方台とされたものであつたが、さらに古いものではないかとおもわれた。これは基底の幅、四・一メートル、殘高〇・五〜一・九メートル、殘長約一〇〇メートル、西周時代の土城の可能性もあるとしている。

(1) 黃展岳「一九五五年春洛陽漢河南縣城東區發掘報告」（『考古學報』一九五六一四）

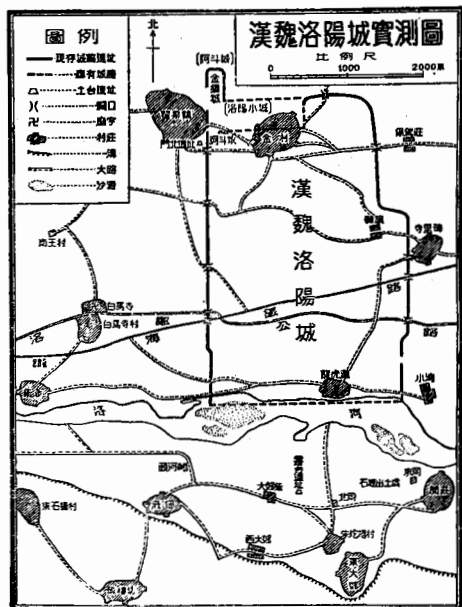
(2) 寶郭鈞「洛陽西郊漢代居住遺迹」（『考古通訊』一九五六一一）

四 漢魏晉北魏の洛陽城

漢魏晉北魏の洛陽城はいまの洛陽市の東郊にある。一九五四年閻文儒教授の一行はこの調査をおこない、そのプランを明らかにした(第4圖)。

漢魏の洛陽は周の成周城と前漢のものをひきつき後漢光武帝の時首都にさだめ、魏晉これをおそい、北魏孝文帝の時、ふたたび帝都として經營されたとつたえている。した

第4圖 漢魏洛陽實測圖 (『考古學報』第九冊による)



がつて現在にのこるものはまさに各代の累積して、北魏にいたつたものである。

漢六朝洛陽城の調査

いまこのあたりは麥畑のなかに土城がむなしくのこつてまさに滄桑の變というほかは

ない。閻教授によると土城は南北に長い長方形で、東は約三八六・七メートル、西は三八一メートル、南は二二〇メートル(復原)、北は二二七・二メートルをはかる。この實測値は『晉元康地道記』の「南北九里七十步、東西六里十步」とくらべると、東は一〇九・三メートル、西は一六一メートル、北は四メートルすくなく、古人のいう九六城と合致するという。この他閻教授は次の點を指摘している。

- 1 『水經注』、『洛陽伽藍記』にいう金墉城は洛陽城の西北に突出したところで、いまにいう阿斗城である。
- 2 北魏の洛陽宮は洛陽の正中にあり、西陽門の東にあたる。いま午門台という南北にたかくなつたところがこれで、午門台は宮城の南垣にあたるであろう。
- 3 洛河の南の「岡上」が太學の遺址であろう。こゝからかつて晉咸寧四年(二七八年)の「辟雍碑」が出土した。

北岡村の西三九〇メートルにある土堆は靈台の遺址であろ

う。

4 いまの白馬寺は『洛陽伽藍記』に「白馬寺は西陽門外三里の外、御道の南にあり」とみえる。いま西側土城より一二五〇メートルにあり、北魏の三里とあう。

5 洛陽城をつくるにあたって、杵子版築と平版築の二つの方法がある。版築のあつさはかならずしも一致しない。版築をつくる際はめた木板(直徑一二一―一五センチ)がのこつてゐる。瓦は漢代蕨手式のもの、北魏の蓮瓣式のものがある。

6 金村の北、東北一帯で採集された灰陶片や石斧、石刀をみると、このあたりに殷以前新石器時代に人がすんでいた。殷代、また殷ほろびても殷人がこゝに居住し、『後漢書』鮑永傳、『洛陽伽藍記』に記するところの「上商里」に殷の頑人がいたという傳説はまったく根據のないわけではないという。

(1) 閻文儒「洛陽漢魏隋唐城址勘査記」(『考古學報』第九冊)一九五五年刊。

北魏の洛陽と漢魏晉の洛陽

さて幸いに漢六朝の洛陽城のプランとその表面觀察があきらかになつた。われわれは

從來の漠然たる知識より大いに前進したのである。將來はさらに發掘調査がすゝむであらう。しかし、こゝで注意しなければならぬのは、われわれのみた洛陽城は數世紀間住まれ、最後は北魏時代に經營されたと傳へてゐることである。

『魏書』高祖(孝文帝)本紀によると、太和十七年九月孝文帝は洛陽に行幸した。こゝで故宮基址を周巡し、洛橋をみ、太學をたすね石經をみており、さらに十月には河南城にはいつてゐる。この月洛陽に遷都する旨をつけ、翌十八年十一月に車駕は正式に洛陽にうつつたのである。『洛陽伽藍記』(以下伽藍記と略す)序例には

大和十七年後魏の高祖、洛陽に遷都し、司空公穆亮に詔して、宮室を營造せしむ。洛陽城内は魏晉の舊による。

とあり、魏晉の例になつたことをいつてゐる。たゞ門などの名稱はこの際あらためたので、漢魏晉との對照を附している。しかし洛陽城が大規模に經營されたのは、次の宣武帝の景明二年(紀元五〇〇年)のことで、『魏書』世宗紀には

九月、畿内の夫、五萬五千人を發し、京師三百二十三坊

をきづく。四句にしてやむ。

『魏書』廣陽王嘉傳にも

京の四面において、坊三百二十を築く。各々周一千二百歩。三正を發して丁を復し、この役にあてんことを乞う。しばらく勞ありといえども、姦盜永くやむ。

とみえ、條坊の區劃に全力があげられたようにおもわれる。

『伽藍記』は幸いにこの條坊についてのくわしい資料をふくんでおり、城内の條坊についてはホワイト師の地圖をもとにして水野清一教授が復原をくわだてた。つゞいて北魏の洛陽城は漢魏晉城をそのまま利用した城内と、その外郭よりなることをはつきり指摘したのは森鹿三教授の功績であつて、こゝにその東限を『伽藍記』卷二城東にみる。

崇義里の東に七里橋あり。石をもつてこれをつくる。中朝の時、杜預荊州にゆくに出頓するところなり。七里橋の東一里。郭門三道を開く。時人號して三門となす。離別多く三門外に相送りて云う。京師の士女、去るをおくり、かえるを迎う、常に此の處に在りという。

またその西方は『伽藍記』卷四城西にみえる

閶闔門をいで、城外七里にして長分橋あり。中朝の時、

穀水にわかに城下に急注して、多く民家を壞す。石橋をたて、もつてこれを限る。長ずれば分流し洛に入る。故に長分橋という。或る人云う。晉の河間王長安に在り。張方をやり長沙王を征す。軍をこゝに營す。張方橋となす。いずれが是なるかを知らず。今民間語り訛して號して張夫人橋となす。朝士の送迎多くこゝにあり。

この東西各七里、計十四里と内城の東西六里計二十里と郡山と洛水の間にある壽邱里の南北十五里をもつて『伽藍記』の最後にみえる

京師東西二十里、南北十五里

にあてたのは明快なる論斷であつた。

いま『水經注』をみると、

橋、洛陽宮を去ること六七里。ことごとく大石を用う。下圓にしてもつて水を通じ、大舫のよきるを受くべし。その上に題して太康三年(紀元二八二年)十一月はじめて就功し、日に七萬五千人を用い、四月末に止む。この橋破落を経て、またあらためて修補す。今文字を復するなし。

とあり、これらの橋はすでに晉の時できていた。そうする

と北魏の城外の條坊は、晉の時洛陽の東西郭のはしに石橋を架してかきつた中につくられたことになるのである。

* * *

晉の時の洛陽に關する知識は北魏の時はすでにかなりおぼろであつたらしい。好事家が趙逸という隱士に「晉朝の時の洛陽の人々は今日どうなつてゐるか」と問うたところ、「晉の時の民は今日のこつてゐるものが少い」とこたえてゐる。西陽門外の北にある光寶寺に三層の塔があつた。趙逸はこれを石塔寺だといつた。逸は「晉朝の三十二寺ことごとく埋滅し、たゞ此の寺のみのこつてゐるのだ」といつて庭の一個所をさし、「これが浴室だ。五歩さきには井戸があるはずだ」というので、衆僧がほつたところ、はたして家屋と井戸がでゝきたという。また崇義里にある三層の塔からは「太康六年歲次乙巳九月甲戌朔八月辛巳饒同三司襄陽侯王濬敬造」の銘がみられた。

晉代には洛陽城内外にしきりに土木をほどこしたとみえて『伽藍記』には建春門外東一里の石橋、魏昌尼寺にある石橋には晉の太康元年（紀元二八〇年）の銘があつたとみえる。『水經注』ではこれらの數橋はいずれも「礪石でつくり、

高莊で、制作甚だ佳し」といつてゐる。魏代のまゝでは狹少であつたので、ほゞ國內の統一のできた太康元年より三年にいたる間さらに外を郭し、石橋などの土木をおこなつたものであらう。晉書帝紀にはかゝる記事はみえないので『伽藍記』『水經注』にのみのこる資料である。晉書帝紀によると太安二年（紀元三〇三年）九月張方が京城に入つて清明、開陽の二門をやいたとつたえ、光熙五年（紀元三一一年）五月劉曜らの手によつて宮廟がやきはらわれてしまつた。この破壊ののち、北魏の再興まで約二〇〇年を要したのであつた。

* * *

魏の文帝黃初元年（二一〇年）十二月はじめて洛陽宮がいとなまれた。裴松之は『魏志』に注し、この時は北宮にいたとしてゐる。太和三年、宗廟をたてたが、翌四年二月、太傅三公に詔して文帝の「典論」をもつて石に刻み、廟門の北に立てた。これが魏の石經である。明帝青龍三年（二二五年）三月には大いに洛陽宮をおさめ、昭陽、太極殿をおこし、總章觀をきずいた。これは南宮にあたる。『水經注』には明帝の時、洛陽城の西北角に金墉城をつくり、景陽山

には芳林園(北魏の華林園)をたてたことをしるしている。金墉城は今いう阿斗城であるが『晉書』などをよむと幽囚の場所としてロンドン塔に似た陰惨な感じをあたえる。芳林園内の天淵池には文帝の九華台があり、洛中の故碑をあつめ、池の南には魏の文帝の茅茨堂があり、その前には黄初年間にたてた茅茨碑があつた。

* * *

後漢光武帝は建武元年(二五年)十月洛陽(後漢では雒陽とよぶ)に都をさだめた。『漢書』高帝紀によると高帝五年(前二〇二年)四月に洛陽を都とし「洛陽南宮に置酒した」とあり、前漢代には長安につぐとりあつかいをうけていた。中元元年(五六年)にはじめて明堂、靈台、辟雍および北郊兆城をおこした。靈台は閭教授⁽⁸⁾のいうように北岡村の西三九〇メートルにある土堆にあてられる。

『伽藍記』では「太上公二寺東に靈台一所基址あり。くずるといへどもなお高さ五丈餘あり。これ漢光武立つる所なり」といつている。『伽藍記』に、つづいて「靈台の東の辟雍は是れ魏の武帝のたつところのもの、(北魏正光中に至りて明堂を辟雍の西南につくる」とみえ、魏の辟雍、

北魏の明堂の位置をしめしている。『水經注』には平昌門の南より明堂(漢光武中元元年立)の下に水をひいていることをしるしている。

「明帝紀」永平三年の條に「北宮および諸官府を京師におこす」とある。班固の「東都賦」にも

且つ夫れ建武の元、天地命を革む。……永平の際に至りて重熙累洽し、三雍の上儀を盛んにし、袞龍の法服を修む。……然るに後周の舊を増し、洛邑を修む。是をもつて皇城の内、宮室光明にして、闕庭神麗、奢もこゆべからず、儉も侈るあたわず。外は原野によつて苑をつくり、流泉に順つて沼となし、蘋藻を發して魚を潜め、圍草をゆたかにして、獸を毓⁽⁹⁾う。制は梁鄴におなじく、誼は靈園に合す。(['文選』卷一)

これを見ると永平年間洛陽の宮室庭苑が大いにおこされたものとみえる。たゞ土城についてはなんらよる記事がない。『章帝紀』元和二年の條に「天下に令して大いに酺せしむこと五日、公卿已下錢帛おの／＼差あり。洛陽の人のまさに酺すべきもの布、戸ごとに一匹、城外三戸ごとに一匹」とみえるから城内、城外の別のあつたことはあきらかであ

る。いま閻文儒教授の漢魏洛陽城實測圖(第4圖)をみると東の土城では韓旗村のところで、西北におれまがり、また南の方でも西南にやゝおれまがつている。この現象は西の土城の南部でもみられるので、もともと中央に方形になつた城があり、これが南北にのばされて、いまの形になつたのではないかという疑問が生ずるのである。『漢書』地理志河南郡の條に「雒陽、周公殷民をうつして成周となす。

『春秋左傳』昭公二十二年晉諸侯を狄泉に會し、其地をもつて大成周之城とし敬王をおらしむ」といい、『後漢書』郡國志にも同様に傳えている。この傳を信すれば、周時の成周より秦漢の洛陽になつたのである。『水經注』によると班固、服虔らの「翟泉は洛陽の東北、周の墓地」という言をひき、「今按するに周の威烈王は洛陽城内東北隅に葬る。景王冢は洛陽太倉中に在り。翟泉は兩冢の間にあり」といつている。洛陽城内東北隅には金村の古墓群⁽⁴⁾があつて、その場所はほぼ一致する。

景王、威烈王の冢のつたえはともかくとして、この墳墓地帯は周時城内であつたとおもわれず、むしろ城北であつたろう。周の成周城は漢魏洛陽城の南半にあり、後世この

上に附加し、さらに北に延長して現在の形をとるに至つたのではないかという疑問である。この附加がいつの時であつたかよるべき充分な資料がない。これはさらに將來現地の調査によつてたしかめられるであらう。後漢代に「新城」とみえるのは、附加したものをさすのであらう。「安帝紀」延初元年「新城山泉水大出」、元初二年「洛陽新城地裂」とある新城はこれであるが、しばらく疑いをのこしておこう。

さて城門は東に上東門、中東門、望京門、北に夏門、穀門、西に上西門、雍門、西明門、南に開陽門、平門、苑門、津門の計十二門⁽⁵⁾があり、城門都尉がこれを掌つた。『古今注』には建武十三年に平門を開いたといつている。中には南宮と永平年間できた北宮があつた。『後漢書』本紀や五行志をよむと火災のたびごとに南北宮にあつた殿署の名がみえる。北宮では德陽殿、永巷署、永樂太后官署、白虎觀があり、廣義、神虎門はその西門である。南宮で崇德殿、永福殿、嘉德殿、和驪殿、雲台殿、樂成殿、楊安殿、丙署、雲台、玉堂などの名がみえる。北宮の位置は北魏の皇城にちかいものであらうか。南宮はその後、魏、晉にもひきつ

がれた。『水經注』によると

〔苑〕門の左は、すなわち洛陽池のところなり。池の東はもと平城門のあるところなり。今塞りて、北、洛陽南宮に對す。故に蔡邕曰う。平城門は正陽の門、宮と相連る。郊祀法駕の由り従い出る所。門の最も尊き者なり。洛陽の諸宮を名づけて南宮という。謬臺、臨照臺あり。『東京賦』に曰く。其の南に謬門、曲榭、邪阻、城洫あり。注に云う。謬門は冰室門なり。阻は依也。洫は城下の池なり。皆屈曲邪行し、城池により道をつくる。故に『說文』に曰く。隍は城池なり。水のあるを池といい、水なきを隍という。謬門はすなわち宣陽門也。門内に宣陽冰室あり

この記事によつて南宮は平門を中心の門とし謬門（宣陽門）の北にちかいところにあることになる。

南の城門外には畢圭、靈昆、鴻徳の諸苑があつたらしい。桓帝の永壽九年七月黄老をまつた濯龍宮は『伽藍記』には洛陽城外西南の崇虛寺の西にあてている。また『伽藍記』によると開陽門の御道の東に漢の國子學堂があつた。

堂前に三種の字の石經二十五あり。碑の表裏に刻する

の字は『春秋』、『尚書』の一部は篆、科斗、隸三種の字をつくる。漢右中郎蔡邕の遺跡なり。猶十八碑あり。餘はみな殘毀す。復た石碑四十八枚、亦表裏隸書の字なり。『周易』、『尚書』、『公羊』、『禮記』の四、また漢學碑一所ならびに堂前にあり。魏の文帝、『典論』六碑をつくる。

太和十七年に至るも猶存す。高祖勸學里となす。

これは熹平四年に蔡邕のしるした六經文字を太學門外にいたこと（後漢書卷九十蔡邕傳）をいうのであろう。魏の文帝のことは黃初五年四月「太學を立て五經課試の法を制し、春秋穀梁博士を置く」と『魏志』卷二本紀にみえ、明帝の太和四年文帝の「典論」を廟門の北にたてたことがおなじく本紀にあるのにあたる。

『水經注』によると

東に一碑あり。これ漢の順帝陽嘉元年立つ。碑文に云う。「建武二十七年太學を造る。年積み毀壞す。永建六年九月みことのりして、太學を修め石記を刻す。年、工徒十一萬二千人を用い作る。陽嘉元年八月作り畢る」。

碑は南面して頌を刻し、表裏字を鏤して猶存して破れず。漢石經の北に「晉辟雍行禮碑」あり。是れ太始二年立つ。

其碑中折す。但し世代おなじからず、物もとにとどまらず。石經淪缺し、半を存し、こわれるにちかし。

閻文儒教授は洛水の南「岡上」⁽⁷⁾が太學の遺址としている。ここからはかつて石經と晉辟雍碑⁽⁸⁾が出土し、『伽藍記』『水經注』の記事とあうのである。

後漢の洛陽は獻帝初平元年三月董卓が洛陽の宮廟および人家をやいた。興平二年三月には李傕が宮室をやいている。『後漢書』董卓の傳によると

ここにおいて天子を西都に遷す。初め長安赤眉の亂に遭い、宮室營寺焚滅して餘すところなし。この時高廟京兆府舍あるのみ。時に便じて幸し、のち未央宮にうつる。ここにおいて、ことごとく洛陽の人數百萬口を長安にうつす。步騎驅蹙、更相踏藉し、飢餓寇掠して尸をつみ、路にみつ。卓自ら畢圭苑中に屯し、悉く宮廟官府と居家をやき、二百里内復た子遺なし。また呂布をして帝陵および公卿已下の冢墓をあばき、その珍寶をとる。

という。惨たんたる光景である。光武帝建武十九年修復された長安の宮室も赤眉の亂によつて壊滅し、洛陽もまた董卓のため破壊をうけたのである。ここからはまさしく『三

國志』の世界であり、魏の文帝および明帝の洛陽宮室の恢復にまたなければならなかつた。

(1) 水野清一「洛都永寧寺解」(前出) 一二三頁。

(2) 森鹿三「勞榘氏の「北魏洛陽城圖的復原」を評す」(『東方學報』京都第二十冊) 昭和二十六年。これは國立中央研究院歷史語言研究所集刊第二十本にのせられた勞榘教授の論文の批評である。勞榘氏はこの論文に北魏洛陽城の復原圖をのせているが、これには従うことはできない。

森鹿三「北魏洛陽城の規模について」(『東洋史研究』第十一卷第四號、昭和二十七年刊) は重要な論文である。

(3) 閻文儒「洛陽漢魏隋唐城址勘查記」 一二二頁。

(4) W. C. White: *Tombs of old Lo-yang*. p. 16.

(5) 後漢、魏晉、北魏では門の名稱に多少の變化がある。『洛陽伽藍記』序にそれをのせている。

(6) 魏の石經は周公廟博物館にある。

(7) 閻文儒、前掲論文、一二二頁。

(8) 同上 一二二頁。

洛陽城郭の發展と隋唐長安城

閻文儒教授の調査をもとにして、北魏よりさかのぼつて漢魏晉の洛陽の復原をこころみた。この場合『洛陽伽藍記』および『水經注』は重要な資料で、漢魏晉のものを明らかにする前に、北魏のも

のをまず明らかにしなければならぬ。幸い北魏城内のプランは、閻教授の漢魏洛陽實測圖にわりつけていくことが可能であり、また從來復原の企てられることのなかつた城東、城南、城西の條坊もトレースすることができる。その詳細についてはまた稿をあらためて發表したいと考える。いまその特長をあげると、

1 宮室は内城の北よりあり、中央の道路をはさんで東西に條坊をわかつていること。

2 外郭に洛陽大市および小市が、東西ほぼ相對照する地點にあること。

など、後に隋唐長安城の形に發展すべき原型をふくんでいるのである。『周禮』考工記匠人には「方九里旁三門、……左祖右社、面朝後市」とみえるが、北魏の洛陽城は、方九里ならざる點をのぞけば、この原則にならつていようにおもわれる。皇城の北に金市のあるのは「後市」という原則のためおかれたのであろう。この點後漢の洛陽が『周禮』考工記の制にどれ程よつているかは今後の問題である。前漢のものをひきついだ點からいつても、南、北の二宮がある點からいつても、北魏代の如く果斷な都市計畫

が行われなかつたうらみがあるようである。

周にはじまり、漢より魏、晉をへて北魏への十數世紀のあゆみは、洛陽の都城の制度を次第に完備し、隋唐長安城の原型を準備した。わが平城京をはじめ東亞諸國の都城の制度に多くの感化をあたえた唐長安城の都制は、一日にしてならぬことを知るべきであらう。

五 洛陽をめぐる漢晉の墳墓

洛陽は漢六朝を通じ、首都であつたのみならず、洛水の平野に洛陽、河南の二城があり、人口産業とも股脈をきわめていたため、帝王をはじめとする墳墓もまた都城とともに當時の社會と生活をかたる有力な材料となつていく。

しかしながら長安附近の前漢の陵墓がその所在と規模がほぼしられているのに對し、後漢の陵墓はいまだ充分に調査されたものがない。魏晉の陵墓についても同様である。

新中國の成立以後洛陽の發展が西郊にのびたために、幸いその方面で發見された漢墓が少くない。燒溝では文物管理委員會の特別な調査をへたのである。燒溝の漢墓はいまだ詳しい報告がないが、澗河の東西にわたる地域のものにつ

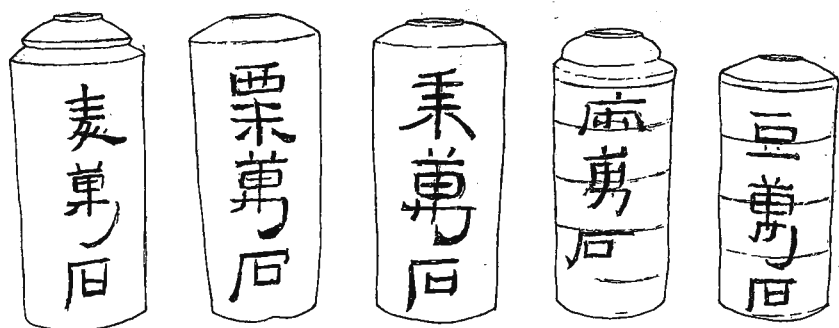
いては、二三報告があり、私どもも金谷園で考古研究所による漢墓發掘を見學することができたので、これを中心にあらましの紹介をこころみよう。

金谷園はさきにのべた東周の土城が發見された場所であるが、この近くの工場建設にともなつてまず地下にボーリングをおこなつて墓の所在をたしかめたのである。ボーリングには洛陽鏟という道具を用いる。ボーリングによつて墓壙の範圍、ふかさ、またはほぼ年代をも推定することができる。私どものみた時は漢墓が三つており、その二つは空墳墓であつた。空墳墓は地下八〜九メートルに垂直に墓壙をほり、空墳で墓室をつくる。墓室の北に左右に小室をつくる。鏡、瓦製明器(かまど)陶器、すすりなどがあつた。空墳を用いないものは地下七メートル、ほりぬきの墓室で瓦製明器(かまど、図)をみる事ができた。墳丘もみとめない狀況であつた。前漢にあてられるという。

一九五三年五月發掘された澗河堤防上の四一號墓^(a)は埴埴墓である。前室と後室(主室)よりなりこの後方は空墳でわかつてゐる。後室はさらに左右の側室がある。四棺あつて二棺は主室、一棺は側室、一棺は前室にあつた。出土品

には内行花文昭明鏡、清白鏡、方格規矩鏡、瓦製明器(かまど、倉、猪圈、犬、耳杯、盒、案など)、五銖、貨泉、小泉直一、貨布、石白などがでてゐる。かまどには鐵釜と瓦甑がかかつてゐた。出土の鏡、貨幣から考えて、すくなくも後漢初年以前にあてられるとしている。

澗河の西にあたる澗西一六工區^(b)では、一九五五年河南省文物工作第二隊の手によつて周漢晉より唐宋代の墓の調査がおこなわれた。この漢墓には堅穴墓、土擴洞室墓、埴砌洞室墓の三つの方式がある。堅穴墓は四個、長方形をなし、ながさ二メートル、はば〇・八メートル、ふかさ二メートル前後である。これには小兒骨をいれた甕棺や、長さ一・一八メートルの陶棺をいれたものがあつた。副葬品としては陶器、彩陶馬、俑がある。土擴洞室墓は六個、長方形の傾斜をした墓道と墓室を地下にほりこむ。五八號墓が二人合葬であるほかすべて一人を葬る。陶器のほか瓦製明器(かまど、倉井戸、甕、鏝斗、方盤、圓盤、雞、犬など)がある。五銖錢が一〇〇枚ほど出た。これは後漢のものだといつてゐる。埴室墓は四基、墓道、墓室を埴でつくつたもので、陶器のほか、鏡、瓦製明器(かまど、井戸、甕、



第5圖 洛陽澗東M4號墓出土陶倉

鏤斗、方盤、圓盤、
狗、雞、猪など）、
弩機があつた。

漢墓副葬品による 二三の問題

燒溝出土のものは
考古研究所洛陽工作
站到陳列されていて、
なかに興味のあるも
のも少くはなかつた。
M八二號墓は一九
五三年發掘されたも
のであるが、小形日
光鏡、彩繪陶鍾、綠
釉陶鍾のほか瓦製明
器（かまど、井戸、
倉）がある。前漢末
年のものであろう。
燒溝では別に建寧三

年（紀元一七〇年）、初平元年（紀元一九〇年）の墨書銘の
ある陶鎖がでてゐる。かかる紀年銘のある遺物の出土によ
り、漢代遺物の様式の變遷もよりに明らかにされるであろ
う。

洛陽澗東M四號墓⁽³⁾は一九五四年調査をみたもので彩繪の
壺、瓦製明器（鼎、鍾、井戸、かまど）などがあるが、お
もしろいのは倉（困）に「麥萬石」「豆萬石」「禾萬石」「麻萬
石」「粟萬石」の朱書のあることである（第5圖）。この種の
資料は周公廟の博物館にもあつて、これは「大麥萬石」「小
豆萬石」「稷米」「秬米」「稻種萬石」「粟萬石」「麻萬石」
としるされている。これは當時栽培されていた穀物の種類
をしめすもので、將來その内容についての詳細な報告が期
待される。

- (1) 郭寶鈞「洛陽三〇、一四號漢墓發掘簡報」（『文物參考資料』一
九五五—一〇〇）。
- (2) 河南省文物工作第二隊「洛陽澗西一六工區發掘簡報」（『考古通
訊』一九五七—三）。
- (3) 中國科學院考古研究所洛陽發掘隊（郭寶鈞等）「洛陽澗濱古文化
遺址及漢墓」（『考古學報』一九五六—一）。

洛陽附近の晉墓

漢代にひきつづく魏のものとは明らかにわかる墳墓はない。ところが一九五三年より五五年にいたる發掘で、晉墓とみとめられるものが五四基調査せられて報告されている。出土品の一部は洛陽周公廟で見學することができた。調査者によるとその分布は「城北」「城西」「潤西」の三區であるが、城というのは現在の洛陽城をさすからすべて晉代洛陽城の西にあたる。

この五四基には堅穴墓と洞室墓の二種がある。前者は四基、後者は五〇基をかぞえる。洞室墓は地下に墓道と墓室をほりこんだもので、小さなものは墓道もしくは入口の一部を埴でできすくにすぎないが、大形のものには墓室をすべて埴でできすく。第二十二號墓が二室よりなる外はすべて單室である。墓室内には遺骸ならびに副葬品がおさめられている。またこのなかに墓誌があつて、ほぼ年代を推定することができるのである。

第一號墓 太康八年(二八七)「晉故中郎、
第八號墓 元康九年(二九九)

晉賈后乳母美人徐氏(女)

第二十二號墓 永寧二年(三〇二)

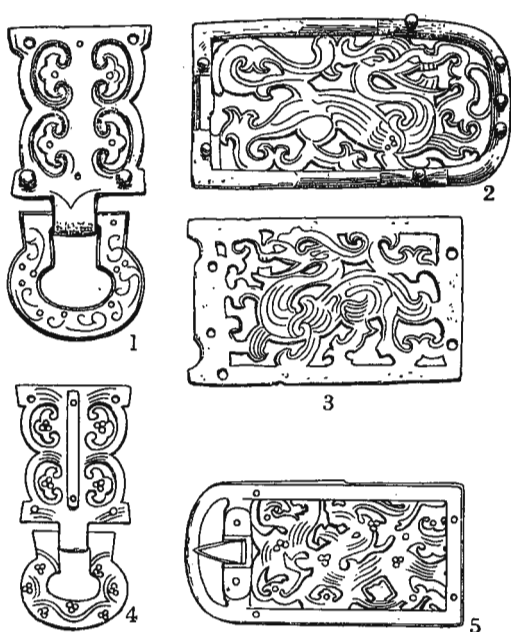
晉前尙書郎北地傅宣故命婦孫世蘭(女)

遺骸は木棺におさめられ、三者合葬一、二者合葬八、單葬一八で、二十二號墓は二子と合葬したことを記している。出土の遺物は陶器、瓦製明器、鏡、裝身具などで、陶器には無釉瓦質の双耳壺、四耳壺のほか、越州窯の破片とおもわれるものをふくんでいる。瓦製明器には武人、婦人の俑馬、犬、雞、一角獸、牛車、燈、かまどなどがあり、人物動物の表現はいささか生硬であるが、その組合せは漢様式をおそつている。かまどの形式もまた漢様式に屬する。

鏡はすべて二十四面、內行花文日光鏡、內行花文昭明鏡、內行花文長宜子孫鏡、方格規矩四神鏡、半圓方形帶神獸鏡、夔鳳鏡、位至三公鏡などがある。位至三公鏡は八面でこれが一番多かつたという。位至三公鏡をのぞくと前漢、後漢のものがあつて、なかには三百年以上も傳世されたと考えるほかのないものを含んでいるのは興味がある。ここで注意すべきはわが古墳時代前期の古墳より盛んに出土する三角縁神獸鏡が一面もないことである。

裝身具の中には第二十六號墓より出た帶鈎と第二十四號墓より出た帶金具がある。帶金具は龍をきり出した鈎具と、

帯に附ける金具の二つがあり、いずれも鍍金をほどこしている。これはわが奈良縣北葛城郡馬見村大塚、新山古墳と
同巧で、同一の製作者の手になるとさえおもわれる（第6
圖）。これに近いものは廣東大刀山の東晉大寧二年（三二四
年）⁽⁸⁾ 塚より出土したことがあつた。洛陽における出土古
墓の詳細がわからないのは遺憾である。晉武帝の泰始二年
（二六六年）に倭人の來貢をしるし、また元康元年（二九一



第6圖 洛陽晉墓（4、5）および奈良縣大塚
新山古墳出土帶金具（1、2、3）

年）東夷十七國が東夷校尉に内附している。建興元
年（三一三年）に樂浪帶方郡がほろびた。これをもつ
て直ちに佐味田新山古墳出土の年代をにわかに斷定
するには至らないが、上代の日中交渉を示す重要な
資料といわねばならぬ。

(1) 河南省文化局文物工作隊第二隊「洛陽晉墓的發掘」

（『考古學報』一九五七—一）

(2) 梅原末治『佐味田及新山古墳の研究』大正十年刊。

(3) 胡肇椿「廣州市西郊大刀山晉塚發掘報告」（『考古學雜

誌』創刊號）民國廿一年刊。

この種、帶金具をとりあつかつたものに、樋口隆康「東
亞における鎔帶金具とその文化的意義」（『史林』第三
十三卷、第三號、昭和二十五年刊）をみよ。

六 おわりに

以上をもつて漢代を中心にした長安、洛陽の案内をおわ
る。漢代には幸いに『史記』『漢書』をはじめ文獻も豊富で、
政權の推移や各地の情勢の大體を了解するにたるのである。
しかし近時にいたるまでその物質文化は全くうかがうを得
ず、樂浪、遼東などの邊郡の調査より推測するにとどまつ

た。長安、洛陽は比較的記述も精細であり、また遺構の年代も明らかで、その調査は漢代考古學における有力な基準たるを失わないであろう。

つきに近時漢帝國版圖内の郡縣の遺跡が豊富に見出されたことは注意すべきである。本誌には杉本憲司、狩野直禎氏による漢代の遺跡地名表がかかげられているが、あるものは當時の郡縣と一致し、その出土品からみて多くは當時の地方官僚士紳のものであつたと推測できる。内容からみると長安、洛陽において行われたものと軌を一にしたものがあり、漢代の上層文化が郡縣を通じて地方にひろまつていく様を看取しうる。また同時に當時一般の生活をも反映するものがあり、かかる考古學資料にもとづいて當時の生活を復原するにたるばかりでなく、正史をあむことさえできるであろう。

兩漢四百年の間、その周辺の地域では石器の使用の段階にあつたところも少くなく、日本朝鮮などの諸國も統一國家としていまだ登場していない。しかしこの間、さらにひ

きつづき直接、もしくは間接に漢帝國の高度の鐵器文明の感化をうけたことはいうをもちいない。この點、ゲルマン諸國に對するローマ帝國の役割にも比すべきところがある。今日その故地における調査の百尺竿頭一步をすすめたことはこの間の事情にも將來大きな貢獻をすべきことは信じて疑わぬところである。

漢六朝にひきつづき隋唐の長安、洛陽もだいに調査せられており、私どもも幸いその一端を見學することができた。その様子はまた機會を改めて紹介することにして、本稿を結ぶことにしたい。(一九五七年九月)

〔補稿〕

1 西安、洛陽の遺跡の所在をあきらかにするため、從來の地圖をもとにして『考古學報』『考古通訊』『文物參考資料』などを參照して要圖を作製してみた(第1圖、第3圖)。今後さらに訂補を加えていきたいとおもつてゐる。

2 西安の漢長安城については王仲殊氏が最近『考古通訊』一九五七―五に「漢長安城考古工作的初步收穫」という報告を公している。湖城、直城、西安門の發掘についてもしるしており、參照されんことを希望する。(一九五七年十月)

were excavated from one and the same tomb. Though the handing down to the posterity of ceremonial vessels was an established practice, it will be still an interesting problem to explore why such bronzes which had been handed down for generations were buried in the tomb.

Ch'ang-an 長安 and Lo-yang 洛陽 in the Time of Han 漢

Takashi Okazaki

The site of Ch'ang-an in the suburbs of present Si-an 西安 was the capital under Former Han, Sui 隋 and T'ang 唐, while that of Lo-yang outside of present Lo-yang was the capital under Later Han, Wei 魏, Chin 晉 and Northern Wei. These two ancient cities played a big role in the making of Chinese civilization after the Chou 周 period, and especially during the period of four hundred years of Former and Later Han they played a similar role in the East to that of Rome in the West. After the Revolution a branch of the Institute of Archeology have been set up at Si-an and Lo-yang, and they are making study of the sites which have been discovered in the process of construction work. With regard to the Ch'ang-an of Han its three gates, the Chih-ch'êng, 直城 the Pa-ch'êng 灞城 and the Si-an-ch'êng, have been excavated, while excavations at Honan-hsien-ch'êng, of Han, which is thought to have been the site of the Chou palace, have been made, and the plan of the Lo-yang of Han and Wei to the east of the present town has been identified. The result of the excavations coincide with the plan of Lo-yang during the period from Han to Northern Wei, which has been reconstructed by historical records.

The Rice Found in a Han 漢 Grave

Sasuke Nakao

Fragments of rice spikelets found in a grave of the Han dynasty (location LS. M 82:59) are studied. The fragments consist of the outer glume, the inner glume and the rachilla of rice spikelets, and all the kernels vanished even inside the closed flowering glumes. The fragments have become white, and seem to have a waxy structure. The microscopical texture of the glumes are well preserved. The spikelets do not bear awns. The length of spikelet is 8.5 mm (one perfect sample) and 8.8 mm (a mean of four samples), 3.9 mm in width 2.2 in the ratio of length and width. These figures are examined in comparison with those found in many places in Asia. The author concludes that the rice in the Han period was more similar to that of present day southern Asia (India) than to that of Japan, Okinawa and Korea. The Han rice seems to belong to *Oryza sativa* Var *indica*.



1. 漢長安城未央宮の遠望



2. [西安東郊半坡遺跡の陳列館



3. 西安大雁塔
(考古研究所西安分室よりのぞむ)



4. 洛陽白馬寺の塔



5. 現在の洛陽城内